【03-C3-003】初めて担任した教師による不登校生徒と学級への指導・援助事例（高校１年生Ｉ子）

クラスの雰囲気がイヤだと訴え、不登校になった生徒と学級への支援事例

キーワード：いじめの訴えを聴く　児童生徒との面接　校内体制、チームを生かした指導・援助　過保護の理解

この事例解説では、不登校生徒とクラスへの指導・援助に取り組んだ新任教師の学びについてまとめました。

問題の概要

７月の上旬、Ｉ子の母親から、「Ｉ子が学校がイヤだ。行きたくないと言っている」という連絡があった。家庭訪問をして話を聞くと、Ｇ子から挨拶しても無視されたり、素っ気なく冷たい態度を取られたりした。それからは学級の中で自分が悪く思われているように感じて、登校したくなくなったとのことであった。

Ｇ子は、中学時代にＩ子をいじめていたというが（Ｉ子談。中学校の担任は確認できなかった）、高校入学後は特に仲の悪い様子は見られなかった。

また、母親によると、Ｉ子に対して「過保護に育てた」「わがままな言い分、行動を許してきた」という。Ｉ子は何をするにも母親を頼り、母親もまるで自分自身の経験や感情のようにＩ子を受け止めるなど、母子分離不安を思わせる状態であった。

対応の概要

◆　登校刺激を控えるかかわりをした

Ｉ子とのかかわり

初めての家庭訪問では、Ｉ子が言う学校が嫌な理由を、うなずきながら、よく聴いた。登校を考えると頭痛や喘息の発作が起こるということで、当面、ゆっくりと休ませ、欠席連絡も連続する場合は、初日だけもらうことで合意した。

学校では、すぐに担任、相談係、学年長、副担任が核となるチームを作った。しばらくは、チームのメンバーで家庭訪問をした。Ｉ子は、自室にこもり、会おうとしないことが多かったが、Ｉ子と会えたときは、趣味（絵画やアニメ）の話しを中心に、学校以外の話題で交流した。

学級へのかかわり

◇Ｉ子の不登校の要因を確かめようと、４月以来の生活の振り返りをテーマに、学級の一人一人と面談を始めた。
◇Ｉ子の欠席理由は「喘息」「体調不良」で一貫して説明した。
◇一人一人が「欠席しても自分は大事にされているんだ」と感じることが学級づくりには大切だと思い、朝の出欠確認の際は、必ずＩ子の名前を呼び、配布物はその都度きちんとＩ子の机の中に入れ、Ｉ子の近況は時々学級で紹介するなどした。

★担任は、どのような学級であればＩ子のような生徒が安心して登校できるのか悩んだ。

◆　突然登校し、また不登校になった

Ｉ子とのかかわり

７月下旬、演劇部のＩ子は、地区高文祭の準備を手伝いたいと言って、突然登校した。周囲は驚いた。しかし２日間午後から登校して準備に参加したものの、また欠席が続いた。

チームでは、９月上旬の定期考査受験や下旬のクラスマッチ参加を勧めてみることにした。考査もクラスマッチも気にかけている様子だったが、実現はしなかった。

しかし、10月初め、文化祭の数日前、突然登校した。やはり演劇発表の準備を手伝おうとしてのことで、非常に元気な様子であった。しかし、文化祭当日は喘息のために休み、周囲をがっかりさせた。以後欠席が続いた。

チームでは、全体の流れとして、Ｉ子は上向きな状態になっていること、登校により、想像以上に緊張や疲れが生じていること、ここで登校を焦らず、ゆっくり対応すること、週１回のペースで家庭訪問をすること等を確認した。

学級へのかかわり

◇学級の協力体制作りと、Ｉ子が学級に入りやすい雰囲気作りのため、学級が総力を挙げて行事や定期考査に取り組むよう働きかけた。

◇Ｉ子の受け入れ準備として、「喘息の説明」「お互いの性格や個性を大切にした付き合い方」「安心して暮らせる学級」等についてできる限り時間を取ってガイダンスをした。

◇一人一人と面談を行った。Ｇ子は、Ｉ子を否定的に見ているわけではなく、むしろ登校時には様子を見守ったり、サポートしてもいいという気持ちがあることがわかった。

◆ 登校継続に向けて働きかけた

Ｉ子とのかかわり

12月になり、欠席が１/３を超えたことを伝え、この状況をどう乗り越えたらいいか考えさせたところ、Ｉ子から冬休みの補充を申し出た。

補充授業は皆勤で、冬休み明けも１週間順調に登校した。しかし、ある日、遅刻してきた時、その教科担任から、一言理由を話してから着席するように指導された。するとＩ子は、教室から出て、泣きながら母親に電話していた。チームでは、いつか機をとらえて、本気で取り組むつもりなのかどうか考えさせ、決心させる必要があると考えていた。そのため、学年長は、Ｉ子を帰宅させた。同行した担任から母親に事情を説明し、「こうしたことでは進級は難しい。指導力不足で申し訳ないが、進路変更も含めて考えてほしい」と話した。

翌日は欠席したが、あとは休まず登校した。

実践のポイント
－初めて担任しての学び－

◎誰もが安心して暮らすことができる学級にするには、生徒一人一人をよく理解するための面談がよかった。自分の価値観を外し、生徒の考えや気持ちを批判せず聴いていったら、次第に本音を言うようになった。

◎担任として、Ｉ子の論理で聴き、Ｉ子の歩幅で考えたのがよかった。チームで対応したため、安心してそうした役割がとれた。

◎学級づくりをする上で、「いじめ」「個性」「居心地のいい学級」などのテーマについて、資料を使いながら、できるだけ時間を取ってガイダンスを実施したことがよかった。Ｉ子の再登校を温かく受け入れることにも役立った。

◎空席でも机の上に物を置かない、プリントはきちんと中に入れる、休んでいても、朝のSHRで必ず呼名をする、時々近況を知らせるなど、周囲の生徒が「欠席しても大事にされているんだなあ」と感じられることが大切だと思った。

◎いつもＩ子の席が空いていて憂鬱だったがＩ子に関わっていくにつれ、それまで気づかなかったＩ子のよさに気づきだした。するとＩ子の考えや受け止め方に共感できるようになり、Ｉ子はさらに心を開いてくれるようになった。これが「生徒理解」かなと思った。

◎学校を休むことは、学校に疲れているからで、Ｉ子には必要な行動。十分休んだら再び歩き始めるとチームとして考えたら、担任としても心の余裕が出た。

◎再登校しても、Ｉ子と何度も面談した。Ｉ子の考えを聞き、理解をしようと思い続けた。

◎周囲の先生方のサポートがありがたかった「Ｉ子を理解し、付き合っていくことは、あなたの財産になる。手伝えることはするから」「俺たちにできることは何でもするよ」「あなたのせいでＩ子が不登校になったわけではない。Ｉ子の成長にとって必要だからなったんだよ」「後のことは任せて、安心して家庭訪問に行ってこいよ」など心の支えになることをいっぱい言ってもらった。

◎生徒から「先生がわからない」と言われた。自分をわかってもらうために、自分は何が好きで、何が嫌いか、何を許すことができないのかなど、学級で何度も話し、伝えることにこだわった。「先生の考え方について行けない」という生徒もいたが、「担任像」がはっきりして、本音を言いやすいという生徒が多かった。